



四旬節第2主日 (マタイ 17:1-9)

「聖書と典礼」を紙ゴミにはしてはいけない

二回目の、公式のミサ中止の日曜日を迎えました。四旬節第二主日ですが、第二朗読を引用して説教を始めたいと思います。「神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください。」(二テモテ 1・8b) パウロが、テモテに宛てた手紙です。テモテに呼びかけられたこの言葉を、私たちはイエスから私たちに呼びかけられた言葉として受け取りたいのです。「神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください。」

教会役員からこんな声をかけられました。「信者のいないミサ、寂しかですね。早く元に戻るといいですね。」本心からこう言ってくれたのだと思います。その役員自身もミサにあずかることができず、辛いのでしょうか。けれどもこの世の中に意味の無い苦しみは無いはずで、苦しみはイエスも常に体験され、苦しみの先に復活の栄光があったのです。

福音朗読は、イエスの姿が変わる場面でした。「イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。」(17・2) イエスの輝く姿を見て、息も止まりそうになったでしょう。人はどうしても、目のくらむような場面を近くにとどめておきたくなって、仮小屋を建てましょうと提案してしまいました。これはどんな人にも起こりうる誘惑だと思います。

自分の意見が皆を納得させた時、「私なら、これからもこの集まりをまとめていける」ついそんな考えを起し、立場を越えてしまいたくなります。何かを進言した時それが方向を決めるほど影響を与えたのを見て、私は影響力があるのだとうぬぼれてしまうこともあります。ペトロもこの場を取り仕切っているのは自分だといふ考えてしまったのです。

イエスの姿が変わり、ペトロが場面を仕切っていると思いかけた時、雲の中から声が聞こえました。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」(17・5) 厳しい叱責ではありませんが、この場面を取り仕切っているのはあくまでもイエスなのだから、イエスに耳を傾けなさい。そういう声だったのです。

私たち今の時代の人間も、出来事を取り仕切っているのは自分たちだと思いを危険はいくらでもあります。2月29日から3月14日まで、長崎教区も公式のミサが中止になりました。大司教様が教区顧問の皆さんと話し合っただけですが、このたびの試練、困難を与えたのは大司教様の通達ではなくて、神様だと思ふのです。

人が用意した試練を乗り越えるのは人の努力ですが、神様が与えた試練を乗り越えるには、神の助けが必要なのです。第二朗読で読まれたとおりです。「神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを

を忍んでください。」病人訪問をする中で元教師であった方が「戦争中もミサが途絶えたことはありませんでしたのに、このようにミサが中止されるのは90年以上生きて、生まれて初めての事です」と仰っていました。この試練を、「神の力に支えられて乗り越える」という体験を積む貴重な機会にしなければなりません。自分たちの力で乗り越えようとする誘惑を斥けなければなりません。

もう何十年も前から、日曜日のミサのために「聖書と典礼」という冊子が用いられています。私は役員にお願いして、先週と今週の「聖書と典礼」を各家庭に配って欲しいとお願いしました。もし何もしなければ、一部30円くらいする冊子が300枚無駄になることになります。それだけでも損失ですが、同じことが浦上教会、滑石教会、飽の浦教会、紐差教会、ひいては全国の教会で使われることなく廃棄されたらどれだけの損失になるのでしょうか。決して「聖書と典礼」を紙ゴミにしてはならないと思うのです。

幸いと言いましょうか、聖書と典礼を無駄にしてはいけないという思いは、誰から聞いたわけでもありませんでした。自分で思い付いたというわけでもありませんでした。これこそ、雲に覆われたように混乱した私の頭の中で、「四旬節の第一と第二主日の聖書と典礼をどうにかして活用しなさい」という神様の呼びかける声があったのだと思います。

神様が用意した試練は、乗り越える力も神様から来ます。私たちはそのことを忘れて自分の力に頼ってはいけないのです。今回の試練が人間によるものでなく、神様からの試練であれば、試練を意味のある経験にするために、そばにいて助けてくださる神様の力を信じなければなりません。そうでないと人間の力や知恵で乗り切ったと勘違いし、得られるはずの経験や知恵を得られないで終わるかも知れません。

「聖書と典礼」を紙ゴミにしてはいけません。この二週間の試練を無駄にしてはいけません。与えられた試練を意味のあるものにするために、神の力と助けを願い、そこから与えられる取るべき態度を確実に実行して過ごしましょう。

四十日の誘惑を父なる神と共に乗り越えた神の子イエスは救いのわざを成し遂げて復活の栄光に入られました。今回の試練を共にいてくださる神様と乗り越えるなら、私たちも神からの誉を受けるに違いありません。